令和６年度
福島県 大学生と集落の協働による地域活性化事業
大学生の力を活用した集落復興支援事業

石川町中谷地区業務実施報告書

獨協大学地域活性化プロジェクト石川町中谷地区チーム

指導教員 経済学部国際環境経済学科 米山 昌幸

[目次] ページ

1. はじめに……1
2. 石川町中谷地区の概要……2
2.1. 石川町中谷地区の位置
2.2. 石川町中谷地区の概観
2.3. 石川町の気候
3. 石川町中谷地区の現状……5
3.1. 石川町・中谷地区の人口
3.3. 石川町中谷地区の暮らし（学校・幼稚園、子育て支援、教育、交通など）
3.4. 石川町中谷地区の産業
3.4.1. 地域の特産品①―あすか米
3.4.2. 地域の特産品②―山葡萄
3.4.3. 地域の特産品③―さつまいも
4. 今年度の活動実績と評価……10
4.1. ミーティングの開催
4.2. 第 1 回現地活動(10 月)
4.2.1. 地域の方たちとの交流・ヒアリング(山葡萄協議会角田氏ほか)
4.2.2. 一般社団法人「ひとくらす」での宿泊・林業体験
4.2.3. さつまいも収穫体験
4.2.4. 文化祭準備
4.3. 第 2 回現地活動(11 月)
4.3.1. 石川町歴史民俗資料館「イシニクル」視察
4.3.2. 「堂平ガーデン」での宿泊・植樹体験
4.3.3. 石川町の伝統的なお祭り「八槻市」の視察
4.3.4. 「食彩あすか」のヒアリング
4.4. 獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2024～Winter～”における福島県復興支援物産展の開催
4.5. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会
5. 石川町中谷地区の抱える問題と課題……22
5.1. 実態調査か得られた問題点
5.2. 取り組むべき課題
6. 次年度の活動計画案……24
6.1. 広大な土地を生かしたビアガーデンやライトアップイベントの実施
6.2. 地元の野菜を使った料理作り
6.3. 町や地区と観光をつなげるロードマップの作成
6.4. 石川町の小・中学生に向けた教材作成

6.5. 石川町についてのビデオ(日本語・英語)を作成・発信
7. おわりに……26

1．はじめに

2024(令和 6)年度、福島県の募集する「大学生の力を活用した集落復興支援事業」への応募にあたっては、全学の学生に向けて参加希望を募り、3 学科から 9 名の学生(英語学科 6 名、国際関係法学科 1 名、国際環境経済学科 2 名)が集まった。

石川町中谷地区を担当する獨協大学地域活性プロジェクト中谷地区チームは、笠原比佳理(学生代表:英語学科 3 年)、齋藤史空(英語学科 4 年)、丹野悠太(国際環境経済学科 4 年)、日野原楓(国際環境経済学科 4 年)、櫻井雅文(英語学科 3 年)、菊地真由子(英語学科 3 年)、三浦大(英語学科 3 年)、溝井綾乃(英語学科 3 年)、太田奏海(国際関係法学科 3 年)、の 3 学部 3 学科計 9 名からなるチームである。地域活動や、海外ボランティア、ワーキングホリデーなどを経験したメンバー、福島県出身のメンバー、これまでに福島県の事業に取り組んだメンバーで構成されている。

写真 1．磐城石川駅での集合写真

本調査報告書は、事前調査と現地調査にもとづいて、中谷地区の抱える問題点を明らかにし、そこから中谷地区として取り組むべき課題を抽出し、課題に対してメンバーが提案をし合い、議論を重ね今後の方向性についてまとめたものである。次年度にはメンバーの経験や知識、地域の特徴や魅力を活かして、具体的なまちづくりの実証実験に繋げたいと考えている。

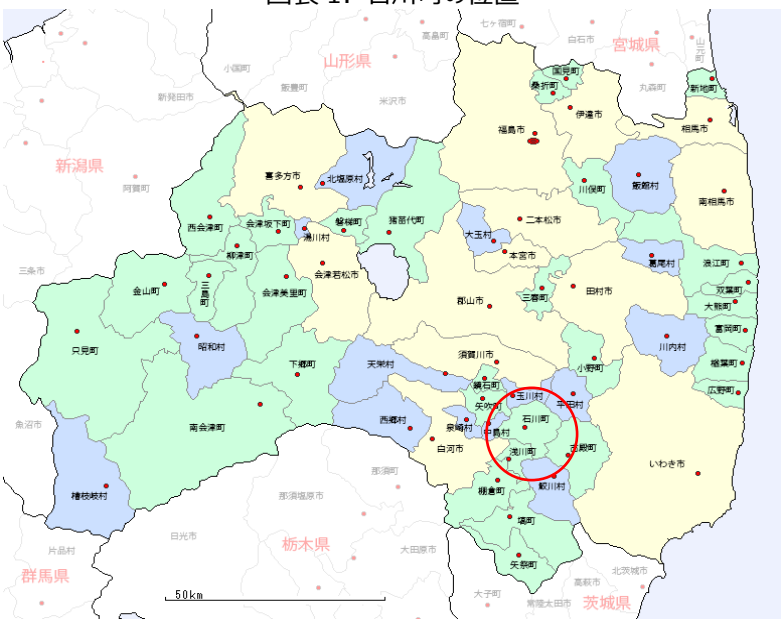
まず、第 2 節で現地調査に入る前の事前調査を中心として、中谷地区の概要や現状をまとめている。第 3 節では現地調査の具体的な内容や、中谷地区の食材を利用した、獨協大学での活動をまとめている。第 4 節では、2 節、3 節の考察を踏まえて、中谷地区が抱える問題を列挙し、そこから私たちが取り組むべき課題と解決提案をまとめた。そして第 5 節では、今後に向けての議論を展開している。

2．石川町中谷地区の概要

2.1. 石川町中谷地区の位置

福島県石川町は福島県の中通りに位置している(図表 1 参照)。阿武隅高地の西側に位置し、豊かな自然環境と歴史的背景を持つ地域である。石川町の中で中谷地区は東側に位置する(図表 2 参照)。かつて石川郡中谷村として独立していたが、1955 年に石川町、沢田村、野木沢村、母畑村、山橋村と合併し、現在の石川町が形成された。石川町には、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が存在し、特に鳥内遺跡は全国的に有名である。

図表 1. 石川町の位置



[出典]47 都道府県の地図「福島県の地図」(https://uub.jp/47/fukushima/map.html)を参照。

図表 2. 石川町中谷地区の位置

[出典]石川町役場「石川まちナビ」(以下の URL)を参照。
(https://navi.town.ishikawa.fukushima.jp/)

2.2. 石川町中谷地区の概観[1]

福島県石川町中谷地区は、町の北東部に位置し、東は古殿町、北は平田村と接している。地区内には本宮区、双里区、形見区、谷沢区、坂路区、谷区、中田区の 7 つの行政区があり、主要地方道いわき・石川線が東西に走り、いわき市と中通りを結ぶ交通の要所となっている。総面積約 26.5 km² のうち、山林が 67.9%(約 18.0km²)を占め、農地は 17.7%(約 4.7 km²)であり、特に山林部は急峻な地形が特徴で、谷間は急な勾配を持つ。一方、中田地区は比較的穏やかな勾配で、里山の風景が広がっている。地区内を流れる今出川や飛鳥川は、古くから人々の生活と深く関わっており、坂路地区はかつて宿場町として栄え、地域の政治・経済の中心地であった。また、石川町全体は阿武隈地域の豊かな緑と清らかな水に恵まれ、総面積は 115.17 km²。町の中央を流れる今出川沿いには桜並木があり、桜の名所として知られています。中谷地区の地形は、急峻な山林と穏やかな里山、そしてそれらを縫うように流れる河川が織り成す多様な景観が特徴である。

石川町への交通アクセスは、福島空港から車で約 15 分ほどである。加えて、石川町内には、95 ヵ所のバス停がある。

2.3. 石川町中谷地区の気候

図表 3 より、夏季(6 月～8 月)は平均気温が 19.4℃から 24.7℃と高く、降水量も増加する傾向がある。特に 7 月は降水量が 187.5mm と最も多く、梅雨の影響が顕著なのも特徴である。一方、冬季(12 月～2 月)は平均気温が 0.3℃から 2.5℃と低く、降水量も少なめで、日照時間は比較的安定している。春(3 月～5 月)と秋(9 月～11 月)は、気温が穏やかで過ごしやすい気候となっている。

なお、石川町中谷地区は内陸部に位置しており、季節ごとの気温差が大きいのが特徴で、年間を通じて適度な降水量があり、農業や自然環境に恵まれた地域と言える。

図表 3. 1991 年～2020 年の石川町年間平均気象データ

月	平均気温(℃)	降水量(mm)	日照時間(時間)
1 月	0.3	46.8	163.5
2 月	1.0	37.8	159.2
3 月	4.5	78.8	187.3
4 月	10.2	94.5	192.7
5 月	15.6	101.1	199.0
6 月	19.4	126.2	152.8
7 月	23.2	187.5	151.2
8 月	24.7	163.8	181.3
9 月	20.4	180.3	142.1

[1] 「中谷地区まちづくり計画」(以下の URL)を参照。
(https://www.town.ishikawa.fukushima.jp/admin/project/01/pdf/02-04.pdf?utm_source=chatgpt.com)

10 月	14.0	127.1	163.1
11 月	7.9	73.1	158.0
12 月	2.5	44.1	162.0

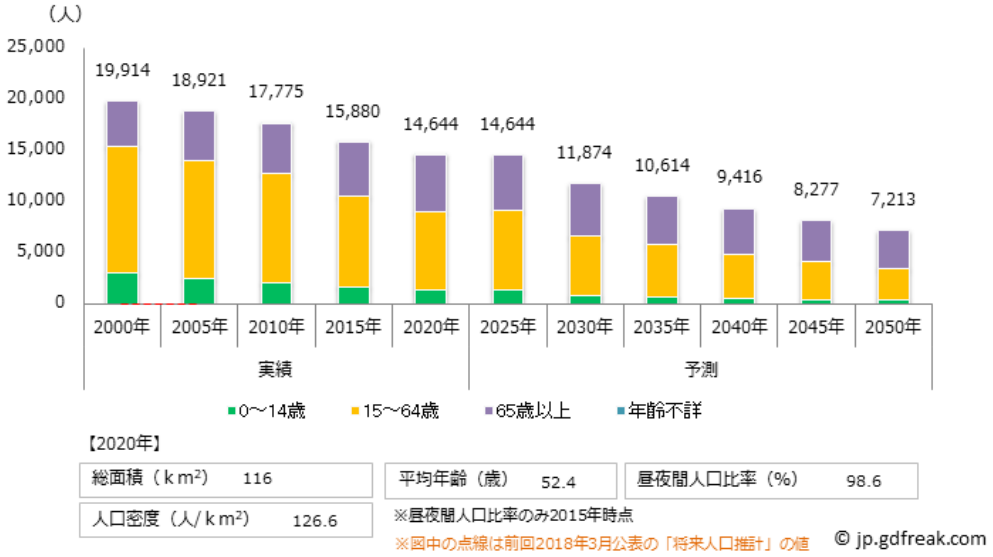
[出典]気象庁ホームページ「石川(福島県) 平年値(年・月ごとの値) 主な要素」(以下の URL)を参照。
(https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/nml_amd_ym.php?prec_no=36&block_no=0307&year=&month=&day=&view=p1)

3. 石川町中谷地区の現状

3.1. 石川町・中谷地区の人口

石川町の 2020 年の総人口は総務省統計局が 2021 年 11 月 30 日に公表した国勢調査結果によると 14,644 人であり、5 年前と比べると 7.8%減少している。図表 4 によると、今後の予想では、2020 年から 2050 年までにはさらに 50.7%減少し、約 7,200 人となる見込みである。このとき 2050 年の平均年齢は、2020 年の 52.4 歳から、5.4 歳上昇し、57.9 歳となる。なお、「平成 25 年～29 年 人口動態保健所・市町村別統計」(厚生労働省)によると、石川町の 2013～2017 年における新生児の出生数は、年平均で 87 人である。人口千人当たりでは 5.5 人(全国平均 7.9 人)となり、全国の市区町村中 1,273 番目となっている。同期間の 1 人の女性が生涯に産む平均子供数を推計した合計特殊出生率では 1.45 である。

図表 4. 石川町の人口推移



[出典]グラフで見る! 石川町(ｲｼｶﾜﾏﾁ 福島県)の人口と世帯 人口推移(以下の URL)を参照。
(https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp01005000001007501/1)(最終閲覧 2025 年 2 月 20 日)

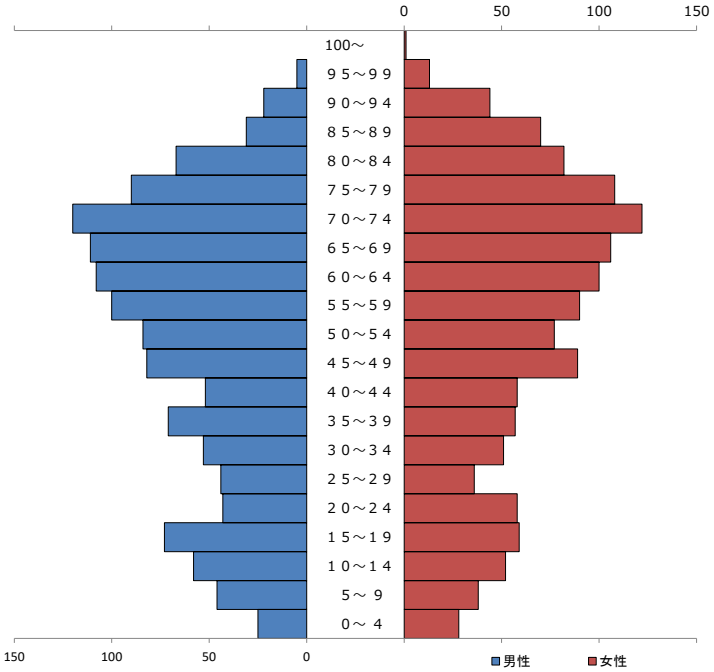
石川町中谷地区は、本宮区、双里区、形見区、谷沢区、坂路区、谷地区、中田区の 7 つの行政区から構成されている。中谷地区の人口として集計されたものはないということであったので、石川町役場より石川町行政区ごとに集計された「現在年齢別人口調べ(住民記録)」をご提供いただいて、そこからこの 7 つの行政区のデータを抽出して、中谷地区の人口を計

算した。

2024(令和 6)年 3 月 29 日時点の中谷地区の総人口(外国人を含む)は 2,624 人であり、男性が 1,285 名、女性が 1,339 名であり、総世帯数は 1,072 世帯であることがわかる。図表 5 は、2024(令和 6)年 3 月 29 日時点の石川町中谷地区における人口ピラミッドである。少子高齢化が進み、つぼ型の形状をしていることが見て取れる。

男性は 20～29 歳の区分が少なくなっていて、女性は 25～29 歳の区分が極端に少なくなっている。男性は 19 歳まで、女性は 24 歳までの区分がある程度いるが、その上が落ち込んでいるのは、就職や結婚を機に、中谷地区から出て行ってしまう若者が多いのでないかと推測される。この世代の男性、女性が社会減によって大きく減ると、新生児の数が減少することになるので、中谷地区の将来人口の減少が深刻化することが懸念される。

図表 5. 石川町中谷地区の人口ピラミッド(2024 年 3 月 29 日時点)



[出典]石川町企画商工課協働推進係提供の「現在年齢別人口調べ(住民記録)」より作成。

3.3. 石川町中谷地区の暮らし（学校・幼稚園）子育て支援など

福島県石川町中谷地区は、地域の教育環境と子育て支援に力を入れており、住民が安心して子育てできる環境が整っている[2]。

中谷地区にはかつて中谷第一小学校と中谷第二小学校が存在しており、現在は統合され、石川町立石川小学校として新たに設立されている。

---

2 「石川町教育ポータル」(https://ishikawa.fcs.ed.jp/)を参照。

●石川町立石川小学校(石川郡石川町双里川向２番地の１)

石川小学校は 2015 年 4 月に町内の 6 つの小学校を統合し、新築校舎で開校した。最寄り駅は磐城石川駅である。全校生徒は 462 名(1 学年 64 名、2 学年 78 名、3 学年 78 名、4 学年 73 名、5 学年 72 名、6 年 78 名)である。

3.4. 石川町中谷地区の産業

主な産業としては農業や林業、畜産等の一次産業が盛んな集落である。ここでは、中谷地区の農林業について概観したのち、1 回目の現地活動の 10 月 19 日(土)と、2 回目の現地活動の 11 月 24 日(日)にヒアリング調査を行った農家の方々と団体を取り上げて、中谷地区の産業について考察する。

3.4.１. 地域の特産品①―あすか米

●あすか米について[3]

現在、中谷地区では複数の種類の米を製造しているが、その中でも中谷地区オリジナルで名付けた米があすか米である。石川町を流れる飛鳥川の谷間で作られていることから名付けられたあすか米。元々の品種はコシヒカリであるが、石川町のミネラル豊富な水と地味豊かな土壌の組み合わせによって高食味のお米を生み出している。

写真 2. あすか米を用いたおにぎり入りのお弁当

(注)メンバーが撮影(以下、とくに記載にないものはメンバーが撮影したもの)。

●あすか米生産の問題点

生産についての問題はまず、米自体の生産の大変さがある。1 年に広大な土地を利用するため、多くのマンパワーと労力が必要になってくる。加えて、近年は降水量も例年よりも少ない傾向にあるため、水不足による影響も少なからずあることが予想される。

実際に上記の理由から米の製造量も全国的に減少しており、全国の米農家が共通して抱える問題である。

[3] 「あすかエコテック」(https://asuka-ecotech.com/prod_cate/kome)より引用。

3.4.2．地域の特産品②―山葡萄[4]

中谷地区の中で1つの特産物となってきているのが山葡萄である。石川町にある石川山葡萄愛好会の角田信氏が、自ら所有する山葡萄農園を用いて山葡萄を栽培し、100%ジュースやワイン、玉ようかんなどに加工し販売を行っている。栽培・運営をしていく上でのコンセプトは背戸山 ism(せどやまイズム)と呼ばれており、住居や畑のすぐ裏にあること山のことを示す背戸山という名の通り、自然の恵が手の届くところにある阿武隈地域の豊かな暮らしを象徴するコンセプトである。

栽培され加工された山葡萄ワインやジュースなどに関して、現在はオンラインでの通信販売や東京などでの定期的な出店販売等を行っている。

写真 3．山葡萄ジュース

写真 4．山葡萄畑

3.4.3．地域の特産品③―さつまいも

中谷地区でさつまいもを栽培しているさつまいも農家さんの協力の下、収穫体験を他の農家さんと共にさせていいただいた。品種は主に紅はるかを中心に生産しているとのことだったが、他にもいくつかの品種のさつまいもが生産されている。

●さつまいも栽培の問題点

さつまいも栽培の中で一つの大きな問題点が買い手、売り手が不足している点である。さつまいもの生産量は多いものの、収穫したさつまいもを加工・販売してくれる卸売の人々が少ない。過去には地元の高校生と協力してスイーツを生産・販売したり、マルシェでの販売などはあったが、継続的に商品として販売していく手段が少ないのが一つの問題点として挙げられる。

---

[4] 石川山葡萄愛好会公式インスタグラム (以下の URL)より引用。
(https://www.instagram.com/sedoyama_ism_yamabudou/)

写真 5．サツマイモ収穫体験の様子

写真 6．収穫したサツマイモ

4．今年度の活動実績と評価

4.1．ミーティングの開催

図表 6 の通り、オンラインで 3 回、対面で 1 回のミーティングを行った。総じて、ミーティングが十分でなかったと思う。次年度は企画提案を実施していくために、学内での綿密な打ち合わせに基づいて、中谷地区とのオンラインミーティングに臨みたい。

図表 6．2024 年度活動報告：ミーティング記録

日付	場所	内容	参加者
2024 年 7 月 5 日	Zoom	・新メンバー顔合わせ	現地の方：3 名 学生：9 名
2024 年 7 月 26 日	Zoom	・今年度以降の活動についての話し合い	現地の方：3 名 学生：3 名
2024 年 10 月 17 日	Zoom	・第 1 回現地調査について	現地の方：1 名 学生：1 名
2024 年 12 月 5 日	学内	・現地調査の振り返りと今後について	学生：6 名

4.2．第 1 回現地活動(10 月)

中谷地区チームは、10 月 19 日(土)・20 日(日)に第 1 回目の現地視察を 5 名の学生で実施した。2 日間、中谷地区自治協議会事務長の志賀一隆氏に同行していただいた。2 日間の現地活動の行程表は図表 1 の通りである。

図表 7．第 1 回現地活動の行程表

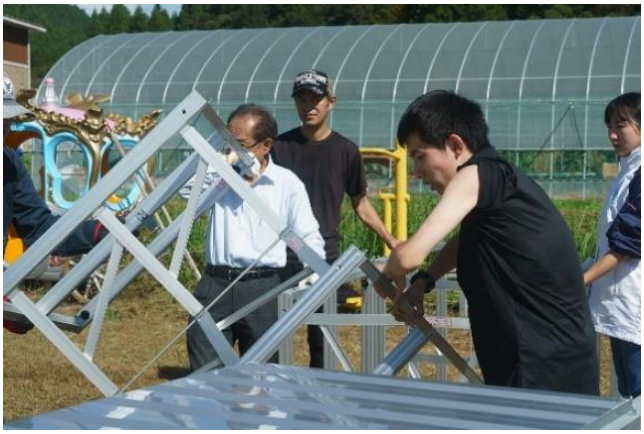
時程	行程
10 月 19 日(土) 08:05～08:56	東北新幹線 やまびこ 125 号(仙台行) 大宮発～郡山着

09:17～10:03	JR 水郡線(水戸行) 郡山発～磐城石川着
10:05～10:25	地元の皆さんによる送迎で、中谷自治センターに向かう。
10:30～	中谷自治センターにて、自治協議会長、地域事業部会員への挨拶 文化祭の準備に参加
12:00～13:00	昼食(もてなしの森)山葡萄愛好会への挨拶　石川町の飛鳥米のおにぎりでおもてなしていただける。意見交換会
13:00～	・石川町山葡萄愛好会代表(角田信さん)へ現地視察 現地視察(実態調査) ・買い物支援団体つながっぺ、生活支援コーディネーター(吉田さん)
16:00～17:00	入浴先:猫啼温泉 式部のやかた 井筒屋(最終受付 18 時、700 円) 〒963-7855 福島県石川郡石川町猫啼 22 Tel.0247-26-1131
17:10	宿泊先(ひとくらす)チェックイン
17:30～	夕食(バーベキュー・意見交換会)
10 月 20 日(日)	
8:00～	朝食
9:00～	宿泊先(ひとくらす)にて、ひとくらす三森美奈子さんにヒアリング調査
10:00～10:15	地元の皆さんによる送迎→中谷自治センターに向けて移動
10:30～11:55	・収穫体験(さつまいも)
12:00～13:30	昼食(交流会)お弁当(地区でご負担いただきます、お世話になります)
13:30～15:00	・収穫体験(さつまいも) ・昨年度より耕作放棄地を整備した畑を見学(2 か所) ・収穫野菜を活用しての今後できることのワークショップ
15:00～15:15	現地活動の振り返り
15:15～	磐城石川駅に向けて地元の皆さんによる送迎により出発
15:37～16:26	JR 水郡線(郡山行) 磐城石川発～郡山着
16:38～17:51	東北新幹線 やまびこ 216 号(東京行) 郡山発～大宮着

4.2.1. 地域の方たちとの交流・ヒアリング(山葡萄協議会角田氏ほか)

1 日目は中谷自治センターの職員、地域おこし協力隊の方々に迎えられ、到着後中谷自治センターにて、地域の方々と共に 11 月に行われる文化祭の会場設営のお手伝いをした。

写真 7,8. 文化祭の会場設営の様子



このように、新型コロナウイルスの感染拡大が収束したあとは地域住民同士の交流の場を設けようと、中谷自治センターでは様々なイベントが開催されている。

また、地域で活動をする方たちの取り組みや思い、現状についてもお話を聞かせていただき地域が抱える問題にも触れた。石川町山葡萄愛好会代表である角田信氏からは、山葡萄の栽培と商品化について伺った。角田氏は SNS を用いた商品広告も行っており、私達も実際に山葡萄玉ようかんを試食させて頂いた。石川町が持続可能な地域へ発展していくことを願い、角田さんは“背戸山 ism”を掲げた復興庁のクラウドファンディングに挑戦している。“背戸山 ism”とは「無い物ねだりより、有るものに感謝」というコンセプトを基に、自らの力で種をまき、収穫して育てて食を楽しむ取り組みである。今も福島県石川町で栽培した山葡萄をジュースや羊羹にすることで、多くの人に石川町の魅力を発信し続けている。

生活支援コーディネーターである吉田氏からは、高齢者が多い中谷地区で行っている買い物支援に関する取り組みについてお話を伺った。週に 2 回バスを運行して行う買い物支援は、足腰の弱い高齢者の交通事故防止策になるだけでなく、住民同士の交流の場になっているという。

写真 9．角田さんの説明を聞くメンバーの様子

写真 10．中谷地区福祉部会吉田さんとの集合写真

4.2.2. 一般社団法人「ひとくらす」での宿泊・林業体験

私たちは廃校を活用した宿泊施設「ひとくらす」に宿泊した。以下は代表理事の三森孝浩氏のヒアリング内容である。

「ひとくらす」は、2015(平成 27)年に閉校となった旧中谷第二小学校の校舎を活用した宿泊施設である。旧中谷第二小学校の閉校後、行政区の主導で廃校利活用検討委員会が設立されたものの、具体的な活用方法がまとまらず、最終的に解散してしまった。しかし、地元に

とって大切な施設を完全に取り壊したり、知らない誰かに売却したりするのは違うと考えた三森氏は、地元の有志に呼びかけ、新たな活用方法を模索する動きを始めた。

この活動を経て、2017(平成 29)年に「一般社団法人ひとくらす」を設立。同じく廃校を宿泊施設として活用している「シラハマ校舎」などを視察しながら、試行錯誤を重ね、施設の運営方針を定めていった。開業当初は台風の影響によりゴミ処理などの環境整備に追われるなど、決して順調なスタートとは言えなかった。

施設運営において、特に課題となったのは電気代の負担である。開業当初から年間約 200 万円の電気代がかかり、近年の電気料金の高騰によって現在では約 230 万円に増加している。また、開業後 3 年間は赤字経営が続き、運営資金の確保が大きな課題となっていた。

しかし、現在では一定の目途が立ち、収益確保の一環として 3 年間契約のレンタルオフィスを提供するなど、新たな運営方法を取り入れている。

「ひとくらす」は、「あるものを生かす」をモットーに、既存の施設や敷地を最大限に活用することを重視している。施設内のプールはひび割れが発生し、修復が困難と判断されたため、新たな利活用の方法を模索した結果、スケートボード場として再活用するというアイデアが生まれた。このように、現状の課題を柔軟な発想で乗り越えながら、地域に貢献できる施設運営を行っている。

また、三森氏は「火」は生活に密着したものであり、その明るさや暖かさが人々に安らぎを与えると考え、この理念をもとに「ひとくらす」を、自然を活かした交流施設として運営している。

現在、施設では体験型イベントやワークショップを積極的に開催し、地域住民や外部の訪問者が楽しみながら学び、交流できる場を提供している。また、こうした活動の様子は、YouTube や Instagram などの SNS でも発信され、地域内外に広く情報を届けることを目指している。

写真 11. ひとくらすの外装

写真 12. ひとくらす内中央ホール

私たちも小学校の面影を感じる雰囲気にどこか懐かしさを感じながら、「ひとくらす」でのひと時を満喫した。夕食の時間にはバーベキューを楽しみながら町の方とコミュニケーションを取ることができた。実際にコスプレイベントで使用した衣装を見せていただき、翌朝には巻き割り体験をさせていただくなど、「ひとくらす」が与える交流の場は暖かさを感じるものだった。

写真 13. 巻き割り体験をするメンバー

写真 14. 製材機で木を加工するメンバー

4.2.3. さつまいも収穫体験

地元の方の協力のもと、さつまいもの収穫体験を行った。普段の生活では中々体験できない貴重な機会であり、石川町の魅力も発見することができた。獲ったサツマイモは 12 月に行われた獨協大学のイベント“Earth Week Dokkyo”で販売させていただくことになった。

写真 15. さつまいも畑のマルチシートをはがすメンバー

写真 16. さつまいもの収穫体験の様子

写真 17. さつまいも畑での集合写真

4.3. 第２回現地活動(9 月)

11 月 23 日(土)・24 日(日)には、2 回目の現地視察を 4 名の学生で実施した。第 2 回目の現地調査はの行程表は以下の通りである。

図表 8. 第 2 回現地活動の行程表

時程	行程
11 月 23 日(土・祝)	
8:05～ 8:56	東北新幹線 やまびこ 125 号(仙台行) 大宮発～郡山着
9:17～10:03	JR 水郡線(水戸行) 郡山発～磐城石川着
10:05～10:25	地元の皆さんによる送迎で、中谷自治センターに向かう。
10:30～	石川町の伝統のお祭り八槻市(やつきいち)見学、石川町歴史民俗資料館見学(石川の歴史と鉱物を学ぶ)
12:00～13:30	昼食(交流会)
13:30～	現地視察(中谷地区：紅葉谷の散策調査) ・体験型宿泊施設見学、意見交換会 ・地域住民との交流会
17:00～	宿泊先(堂平ガーデン矢内邸)着
11 月 24 日(日)	
8:05～ 8:56	東北新幹線 やまびこ 125 号(仙台行) 大宮発～郡山着
9:17～10:03	JR 水郡線(水戸行) 郡山発～磐城石川着
----------	----------
9:00～10:00	朝食
10:00～12:00	中谷自治センターにて、NPO 食彩あすか(見守り)にヒアリング調査
12:00～13:30	昼食

13:30～15:00	中谷地区自治協議会の主な取り組みのヒアリング調査
15:00～15:15	現地活動の振り返り
15:15～	磐城石川駅に向けて地元の皆さんによる送迎により出発
15:37～16:26	JR 水郡線(郡山行) 磐城石川発～郡山着
16:38～17:51	東北新幹線 やまびこ 216 号(東京行) 郡山発～大宮着

4.3.1. 石川町歴史民俗資料館「イシニクル」視察

1 日目は石川町の歴史資料館「イシニクル」に足を運んだ。町の歴史や民俗資料、鉱物標本を展示しており、映像シアターや VR 体験コーナーを備え、楽しみながら石川町を学べる施設であった。以下は映像シアターの内容を要約したものである。

石川町の地質は、堆積岩・火成岩・変成岩の三種類で構成されており、特に火成岩の一種であるペグマタイトが特徴的である。この独特な地質は、石川町の鉱業発展の基盤となり、地域の産業や経済に大きな影響を与えた。石川町には旧石器時代から人々が定住し、縄文時代から弥生時代にかけて広範な地域との文化交流が行われていたことが分かっている。特に豊地遺跡からは、東北、関東、北越、東海、北九州の影響を受けた弥生土器が出土しており、石川町が当時の広域交易の一端を担っていたことを示している。

平安時代には、石川町は東北地方を支配していた平泉の藤原氏の勢力下にあった。その後、鎌倉時代に入ると鎌倉幕府の影響を受け、戦国時代には周辺の戦国大名の支配が変遷する中で重要な地域となった。このように、石川町は東北と関東の接点として、時代ごとに異なる権力の影響を受けながら発展してきた。

江戸時代になると、石川町は宿場町として発展し、商工業が盛んになった。特に、いわき地方(磐城)方面からの海産物取引が活発に行われ、地域経済の発展を支えた。このような商業活動の活発化は、後の自由民権運動の発展にも影響を与えたと考えられる。

幕末から明治にかけて、石川地方では民衆による政治参加の動きが見られた。1874(明治 7)年には、石川区長として河野広中が赴任し、住民が話し合いによる政治を進めることを奨励した。翌年には、東北地方における自由民権運動の先駆けとされる「有志会議」を結成し、地域の政治意識の向上に貢献した。こうした取り組みは、後の国会開設や議会政治の発展にも影響を与え、全国的な運動へと波及した。

石川町は鉱物資源が豊富であり、地元の研究者や技術者の調査によって鉱物山地としての価値が明らかになった。明治 40 年代(1907 年以降)には工業化が進み、ガラスの原料となる珪石(けいせき)などの鉱物の採掘が行われるようになった。しかし、1937(昭和 12)年の日中戦争勃発以降、レアメタルや戦略資源の採掘が軍需目的で活発化し、太平洋戦争末期には原爆開発のための資源採掘も行われたとされる。

昭和 30 年代(1955 年～)には、石川町には 100 を超える鉱山が存在し、鉱業の最盛期を迎えた。しかし、採掘量の減少やエネルギー政策の変化により、鉱業は衰退し、1973 (昭和 48)年には全ての鉱山が閉鎖された。これにより、石川町の鉱業の歴史は幕を閉じ、地域の産業

構造が大きく変化することとなった。

石川町は、古くからの歴史と多様な文化の影響を受けながら発展してきた。地域の人々が築いてきた物語は、時代を超えて受け継がれている。これからも、石川町の歴史を次世代に伝え、大切な文化を守り続けることが求められている。

写真 18. 玄関正面にあるペグマタイト

写真 19. 飛翔狛犬の説明

4.3.2.「堂平ガーデン」での宿泊・植樹体験

古民家を改修した宿泊施設「堂平ガーデン矢内邸」を訪問、宿泊し、施設見学や植樹体験もすることができた。ここでは堂平ガーデン代表の川島氏からお話を伺った。堂平ガーデンは、農家民泊施設および貸切キャンプ地として運営されている。もともとは川島氏の母親の実家であり、それを再利用して宿泊施設として活用している。特徴として、一度にひと組限定の宿泊となっており、訪れる人々に静かで落ち着いた時間を提供する場となっている。

また、「静かで何もないことが、この場所の良さ」だと川島氏は語る。都市部の喧騒から離れ、自然の中で穏やかに過ごせる環境が魅力の一つとなっている。自然豊かな堂平ガーデンの庭は、川島氏の母親の誕生日ごとに花や木を植えたことで、次第に立派なガーデンへと成長した。こうした個人的な想いが込められた空間が、訪れる人々にとっても心温まる場所となっている。

現在、屋根裏の空間を活用し、子どもと親が別々に同じ場所でくつろげるスペースを DIY で作成中である。このプロジェクトには、SNS を活用してボランティアを募り、多くの人々のアイデアを取り入れながら進めている。DIY 体験会としても実施し、参加者同士の交流の場としても機能している。

川島氏の今後の目標は、堂平ガーデンを石川町のランドマーク的な存在として注目される場所にすることである。そして、より多くの人々を堂平ガーデンに誘致し、「なぜこんな山の中にこんなに人が集まっているんだ？！」と驚かれるような場所を作りたいと考えて

いる。

堂平ガーデンは、単なる宿泊施設ではなく、地域の人々や訪れる人々が関わりながら成長する場所となっている。今後の発展により、さらに多くの人々がこの場所に魅了され、訪れることが期待される。

写真 20．植林を体験するメンバー

写真 21．堂平ガーデン前での集合写真

4.3.3．石川町の伝統的なお祭り「八槻市」の視察[5]

八槻市は、石川町の近津神社周辺で、毎年勤労感謝の日に開催される伝統的な祭りである。この祭りは、五穀豊穣を祝う近津神社の例大祭として行われ、地元では「やつきさま」として親しまれている。祭り当日は、数多くの露店が立ち並び、無病息災や家内安全の縁起物とされる柚子や生姜、衣料品、雑貨などが販売され、冬支度の市として賑わう。また、よさこい踊りやバルーンパフォーマンスなど、多彩なイベントも催され、石川町の冬の風物詩となっている。

写真 22．八槻市の様子

[5] 石川町ホームページ「近津神社秋季例大祭・八槻市開催のお知らせ」(以下の URL)を参照。(https://www.town.ishikawa.fukushima.jp/seeing/entry/005086.html)

4.3.4.「食彩あすか」のヒアリング

●食彩あすかについて[6]

NPO 法人「食彩あすか」を訪問し、ヒアリングを行った。「食彩あすか」は、2015 年に主婦の任意団体として設立され、2020 年に NPO 法人化した。現在は、平日週 5 回、リーズナブルなお弁当・お惣菜の販売や高齢者向けの宅配サービスを中心に活動している。地元で採れた野菜なども活用している。通常は 1 日 40～50 食、多い時には 80 食を提供。また、大きなイベント時には団体向けに注文を受け、配達も行っている。さらに、過去には隣接するいわき市での災害時に炊き出しを実施するなど、地域貢献にも積極的に関わってきた。

写真 23. 食彩あすかさんとのヒアリングの様子

写真 24.「食彩あすか」代表有賀正子氏と記念撮影

ヒアリングを通して強かった印象は、若者のニーズが分からないという悩みである。従業員の多くが比較的高齢であるため、若者の食の好みやトレンドを把握することが難しく、新しいメニュー開発が進まないという課題を抱えている。ヒアリングから客層が高齢者といった特定の年齢層の人に偏ってしまっている点が挙げられた。地元の小・中学生と接点を持つ機会が少なく、コラボイベントもないため、若年層との関係構築が難しいことが想像できる。加えて、その顧客も同じメニューやパッケージの繰り返しに対して飽きてきているのではないかという意見も出た。

また顧客の声を集める仕組みがないというのも大きな悩みであると言っていた。お弁当やお惣菜を購入する顧客の満足度や意見を直接聞く機会がなく、そのためサービスの改善や新しい取り組みを検討する際に、顧客の声を十分に反映できていない状況にある。

そして質疑応答の際、私たちはこれらの課題に対し、いくつかの改善策を提案した。まずはお弁当配達時のアンケートやスタンプカードの導入である。これは顧客からのフィードバックを集め、ニーズの可視化を図るためである。そして 2 つ目にパッケージやロゴのリニューアルである。地元の小・中学生と協力して協働のメニューの開発や新たなパッケージの

6 「あぶくま地域づくり推進機構」(http://www.npo-abukuma.org/2021032201/)より引用。

作成といったことを提案した。ユニークなパッケージングによりお弁当の「特別感」を演出し、消費側が飽きるのを防ぐためである。

これらの提案に対し、はじめは肯定的な反応を示してくださったものの、これまでの活動を見直したり、変化を求める姿勢はあまり見られなかった。現状維持を重視する姿勢が強く、積極的に新しい取り組みを導入することには慎重な印象を受けた。

また、今回は私たちの提案自体が現場の実情に合っていなかった可能性もあり、より具体的で実行可能なアイデアを提示する必要があったと考えられる。単に改善策を提案するだけではなく、現場の実態を深く理解し、それに適したアプローチをとることの重要性を改めて認識する機会となった。

今回のヒアリングを通じて、「食彩あすか」が抱える課題は明確になったものの、大きな変革を促すにはより慎重かつ現実的なアプローチが必要であることが分かった。特に、顧客の声を直接収集できる仕組みの導入や、地域の若年層とのつながりを深める取り組みは、今後も模索する価値がある。

また、組織の保守的な姿勢を考慮すると、大きな変化を求めるのではなく、実行可能な小さな改善を積み重ねることが重要だと感じた。例えば、地域の学校と協力した食育イベントの開催や、学生の視点を活かした新メニューの試作など、現場の負担を抑えつつも新しい要素を取り入れる方法を検討していく必要がある。今後は、さらに現場の状況を理解し、実際に受け入れやすい形での支援を考えていきたい。

写真 25.「食彩あすか」代表有賀正子氏とメンバー

4.4. 獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo における福島県復興支援物産展の開催

本年の活動において、獨協大学の環境週間 “Earth Week Dokkyo”における福島県復興支援物産展の開催が、最も大きな取り組みとなった。

今回の活動では、10 月に石川町で収穫したさつまいもを活用し、不揃い野菜の美味しさや、規格外野菜が市場に出回らず収益化されない現状、さらには地域の人々が楽しみながら栽培に取り組んでいることを、SDGs の視点から学生や教員に伝えることを目的とした。こ

の活動は、12 月 2 日(月)と 3 日(火)の 2 日間にわたって実施され、本活動のメンバーである三浦大の個人店 Coffret とのコラボレーションを実現した。販売商品として、さつまいもと胡桃のメープルスコーン、さつまいもと信州味噌のマフィン、さつまいものハニーバターブレッド、焼き芋の加工品などが提供されたほか、生のさつまいもも販売した。結果として、初日は 45 分で完売、2 日目は倍量を用意したものの、30 分足らずで完売するほどの反響を得た。このイベントを通じて、石川町の美味しい野菜や、不揃い野菜の味の良さ、さらには地域の魅力を多くの人に伝えることができた。

今後の展望として、毎年の Earth Week Dokkyo において石川町中谷地区の魅力を継続的に紹介し、さらなる野菜や特産品を取り入れた「福島県復興支援物産展」として規模を拡大することを目指す。また、獨協大学の学生が中谷地区の文化祭や地域イベントに参加し、地域の活性化に貢献することや、大学と地域がアイデアを共有し合う架け橋となることを期待している。

写真 26．さつまいもと信州味噌のマフィンとメープルスコーン

写真 27．並べられた販売商品

写真 28．ハニーバターブレッド

写真 29．さつまいもを加工する様子

4.5.「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会

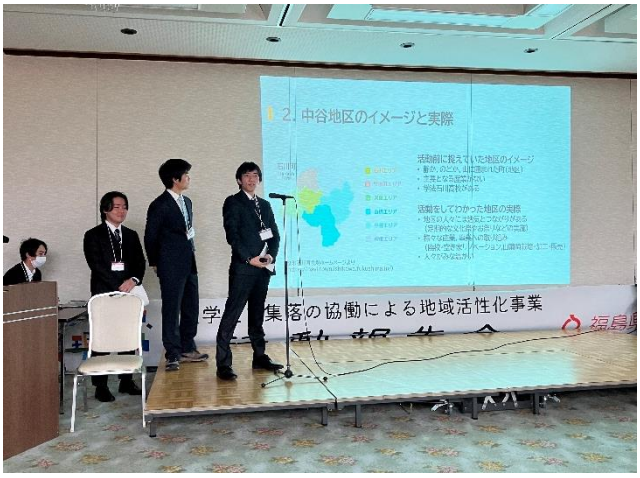
2025 年 2 月 7 日(金)に福島県庁での福島県知事表敬訪問報告会と 8 日(土)に行われた本年

度の活動報告会に参加した。大変光栄なことに内堀雅雄福島県知事の前で発表する機会をいただくことができた。私たちの報告では、地域の実態調査、2 回の訪問、そこで発見した地域の課題、そして今後の活動方針について知事に発表を行った。知事のリアクションもあり、非常に発表しやすい雰囲気の中で進めることができた。この活動に懸ける私たちの想いや熱意を、知事にストレートに伝えることができたと感じている。

8 日には、総勢 21 グループによる活動報告と意見交換会が開かれた。各グループが短時間で発表を行う形式であり、私たちも 3 分間という限られた時間の中で、ただ資料を読み上げるのではなく、ライブ感を重視しながら、この活動にどれだけ真剣に取り組んできたのかをアピールすることを意識した。また、私たちは活動 1 年目ということもあり、今後のビジョンについて明確な方向性が定まっていなかった。しかし、3 年目・4 年目の福島県学生事業における先輩たちの活動を聞くことで、今後の動き方の参考になるアイデアを多く得ることができた。さらに、他グループのメンバーと交流を深めたことで、今後とも協力し合いながら活動を進める可能性が広がった。これを機に、どのように活動の幅を広げ、よりグローバルな視点を取り入れていくかを考え、今後の展開をより具体的に描いていきたいと考えている。

写真 30. 内堀知事との記念写真

写真 31. 活動報告会での発表の様子



5. 石川町中谷地区の抱える問題と課題

5.1. 実態調査か得られた問題点

中谷地区は、少子高齢化が急速に進み、担い手不足などでの畑作放棄地や空家が増え続け、大きな問題となっている。また、県内外からの移住希望者や高校生、大学生等との交流が少ないことも問題として挙げられる。

現地視察とヒアリング調査を通じて、地域の世代間における考え方の違いが大きな課題

として挙げられた。中谷地区には、自治協議会事務長の志賀氏をはじめ、「山葡萄愛好会」代表の角田氏、「ひとくらす」代表理事の三森氏、「堂平ガーデン」代表の川島氏など、積極的に地域の発展に取り組む活動者が多く、学生の提案に対しても協力的な姿勢が見られる。しかし一方で、現状の維持に精一杯で、新しい取り組みを推進する余裕がないと考える住民も存在しており、地域内での意識の違いが明確になっている。

私たちが考える地域活性化には、住民が単なる「来訪者」ではなく、「自律的な関係者」として地域の行事などに関わり続けることが重要である。しかし、現状では地域活動に積極的に関わる人とそうでない人の間に温度差があり、一部の住民に活動の負担が集中してしまう傾向が見られる。特に、若年層が地域に愛着を持ち、地元の一員として関わり続けるための仕組みが不足している点が課題として挙げられる。

また中谷地区には、豊かな自然、歴史、文化、地元の食材といった貴重な地域資源が数多く存在する。しかし、それらが十分に活用されておらず、地域の特色を活かしきれていない状況にある。観光資源や特産品を効果的に PR し、外部からの関心を集める仕組みが求められている。

最後になるが、ユニークなイベントが少ないことが問題点として挙げられた。私たちの印象では、中谷地区はイベントを頻繁に実施しているように見え、また会場設営のお手伝いをさせていただいた文化祭も独自性にあふれるものだと感じた。しかしヒアリング調査では、「非日常的で創造的なイベントをもっと増やしたい」という要望があった。地域の魅力を再発見し、新しい取り組みを生み出すためには、既存の活動にとどまらず、地域の特色を活かしたユニークなイベントや企画を実施することが必要であることは確かである。

5.2. 取り組むべき課題

【世代間の交流促進】

世代間のギャップを埋めるためには、年齢を問わず参加できる交流の場を設けることが重要である。世代を超えて意見を交わし、共に活動できる場を提供することで、地域内の連携を強化し、新たなアイデアを生み出すことが期待される。

【住民の主体的な関与を促す仕組みづくり】

地域の未来を持続可能なものにするためには、住民が地域の魅力を再認識し、自発的に活動に関わる意識を育てることが必要である。そのために、地域の歴史や文化を学ぶ機会を増やし、「自分ごと」として地域活動に参加できる環境を整えていくべきである。

【地域資源を活かした観光・PR 戦略の強化】

町にある施設や地元の食材、学校などの地域資源を活用し、観光や地域振興につなげる取り組みを進める必要がある。具体的には、地域独自の観光ロードマップの作成や、英語を活かした情報発信、特産品の販売促進などを検討していくことが求められる。

【クリエイティブなイベントの企画・実施】

地域に新たな活気をもたらすために、住民のニーズに応じた創造的なイベントの開催が

必要である。特に、私たち英語学科の学生が持つ知識や海外経験を活かし、地域の特色を発信する企画を提案することが可能である。例えば、国際交流をテーマにしたワークショップや、地元の食材を使った料理イベントなど、外部からの関心を集める取り組みを推進していきたい。

私たちの実態調査を通じて、中谷地区には多くの魅力がある一方で、世代間のギャップ、住民の主体性の課題、地域資源の活用不足、イベントの少なさといった問題点が浮かび上がった。今後は、これらの課題に対して、交流の場の創出、住民の関与を促す仕組みの整備、地域資源を活かした観光戦略、クリエイティブなイベントの企画を進め、持続可能な地域活性化に貢献していきたい。

6. 次年度の活動計画案

6.1. 広大な土地を生かしたビアガーデンやライトアップイベントの実施

堂平ガーデンに広がる広大な空き地を活用し、ビアガーデンやライトアップイベントの実施が検討されている。特に、2 日目の議論では空き地利用についてのアイデアが多く発案され、単に大人がビールを楽しむだけでなく、子供も参加できるイベントの開催が望ましいとの意見が多く挙がった。

具体的には、季節ごとに家族で楽しめるイベントが提案され、春には「桜を描く会」、夏には「虫取り大会兼標本作成」、秋には「きのこ栽培体験」、冬には「雪だるま作りコンテスト」などが候補に挙がった。これらの企画を通じて、世代を超えた交流の場を提供し、地域全体の賑わいを創出することが期待されている。

6.2. 地元の野菜を使った料理作り

今後の活動として提案されているのは、地元の野菜を活用した料理作りである。具体的には、堂平ガーデン矢内邸の余剰土地を活用し、「地元フェスティバル（仮）」と称したイベントを開催する案が挙がっている。このフェスティバルでは、地元の野菜を使った料理の販売に加え、野菜をモチーフにした作品制作（野菜スタンプなど）を取り入れ、地元農産物の魅力を発信することが目的とされている。また、SNS を活用した情報発信を行い、地域外からの関心を集めることで、人々の誘致につなげることも視野に入れている。

さらに、今年度の“Earth Week Dokkyo”で行ったさつまいもの加工販売の取り組みを基に、これを発展させた「さつまいもフェスティバル」を開催する案も検討されている。このフェスティバルでは、地元でどのような野菜が収穫されるのかを紹介し、市場に出回らない規格外野菜の現状を住民に伝えることで、地域の新たな魅力を発見し、地元への関心を高めてもらうことを目的としている。

また、「食彩あすか」の弁当を活用し、地域で採れた野菜をより強調することで、食の安

全性や国産野菜の価値を再認識してもらうという案も挙がっている。この取り組みを通じて、地元農産物の魅力を地域住民に再発見してもらうとともに、地域資源を活かした持続可能な活動へとつなげることが期待されている。

これらの提案は現段階では構想の段階であり、具体的な活動の見通しはまだ立っていないが、今後の議論や関係者との調整を通じて、実現可能な形を模索していく予定である。

6.3. 町や地区と観光をつなげるロードマップの作成

これは中谷地区自治協議会事務長の志賀一隆氏が発案したもので、地域観光の活性化を目的とした取り組みである。現在、石川町全体の観光マップは存在するものの、中谷地区独自の観光マップは作成されていない。そこで、中谷地区ならではの魅力を発信するために、独自の観光ロードマップの作成を計画している。

このマップの特徴として、メンバーが撮影した写真や描いた風景を挿絵として使用し、視覚的に魅力的なものに仕上げることを考えている。また、英語学科のメンバーが多いことを活かし、外国人観光客向けの英語キャプションを付け加えることで、訪日外国人にもわかりやすい内容にすることを計画している。この取り組みは、これまで行ってきた地域の実態調査の延長線上にあるため、比較的実行しやすいという点も強みである。

今後の具体的な動きとして、次回の訪問では、事前に散策ルートを決定し、いくつかのグループに分かれて写真撮影を行うことがすでに提案されている。その際、地元の人々の意見を取り入れるため、長年土地に住んでいる住民にアンケートやインタビューを実施し、観光ルートを決める際の参考にしたいと考えている。ロードマップの作成を通じて、石川町と中谷地区の魅力を再発見し、地域の観光資源を最大限に活かした情報発信を目指していきたい。

写真 33. 磐城石川駅にて（現存する観光マップ）

6.4. 石川町の小・中学生に向けた教材作成

本活動のメンバーには英語学科の学生が多いことから、新たな取り組みとして石川町の

小・中学生向けの教材を作成するプロジェクトが発案された。この活動は、6.3 で提案されたロードマップ作成の次の段階として位置づけられ、より教育的な側面を強化した取り組みとなる。

現時点では、対象を中谷地区に限定せず、石川町全体を主題とすることを目標としている。特に、英語教育の要素を取り入れることが不可欠であり、小・中学生が英語を通じて地域の魅力を学べるような教材の作成を目指す。

現在、学校で使用されている英語の教科書では、題材が一般化されており、地域固有の文化や歴史が反映された内容はほとんどない。そこで、この活動では、「地元の特色を日本語でも英語でも説明できるようになる」ことをコンセプトとし、石川町の文化や歴史を学びながら、同時に英語表現のスキルを高められるような教材を作成する。

具体的には、「イシニクル」などで学んだ地域の歴史や文化を活かし、例えば「飛翔狛犬」をテーマに、日本語と英語の対訳形式でわかりやすく説明する教材を作成することが考えられている。このような取り組みを通じて、地元の小・中学生が地域の魅力をより深く理解し、英語を使って外部の人々に伝えられる力を養うことを目的としている。

最終的には、地域の歴史や文化を学ぶことと、英語教育を組み合わせた新しい学習の形を提供することを目指し、石川町の教育に貢献していくことを目標としている。

6.5. 石川町についてのビデオ(日本語・英語)を作成・発信

6.4 で提案された教材の内容を映像化することも可能ではないか、という意見が挙がった。このアイデアは、石川町の魅力をより多くの人に伝えるための新たな手段として検討されている。6.4 と同様に、単に日本語で PR を行うのではなく、英語も積極的に取り入れた映像を作成することで、国内外の人々に向けて発信することを目指す。映像では、石川町の自然、歴史、文化、特産品などを紹介し、日本語と英語の両方でナレーションや字幕をつけることで、地域の魅力を多様な視聴者に伝えられるようにする。

この取り組みによって、地域の人々だけでなく、訪日外国人や海外の視聴者にも石川町を知ってもらうきっかけを作り、地域の観光促進にもつなげたいと考えている。

７．おわりに

今回、私たち獨協大学地域活性化プロジェクト中谷チームは、外国語学部の学生が中心となっており、メンバー全員海外でのボランティア、ワーキングホリデー、国内でのふるさとワーキングホリデーや 3 名の福島県出身者(郡山市、福島市、二本松市)、他の福島県事業参加経験者など、多様な経験を積んだ学生の集まったグループである。

10 月 19・20 日に現地調査で中谷地区を訪れた際、住民の皆さんは、はじめて会う私たちを快く受け入れてくださった。磐城石川駅から最初に訪れた中谷自治センターでのヒアリング調査、夜に宿泊施設「ひとくらす」さんで行った交流を含めた BBQ はいい思い出である。加えて 2 日目に行った林業体験とさつまいもの収穫体験は普段の生活では中々できな

い貴重体験であった。

11 月 23・24 日の 2 回目の現地調査では、石川町の伝統的なお祭りである「八槻市」の視察や石川町歴史民俗資料館を訪れ、石川町の歴史や風土、文化を学ぶことができた。加えて 2 日目は宿泊した「堂平ガーデン」さんで植樹体験、また「NPO 法人食彩あすか」さんとのヒアリング調査を行った。さらには現地調査最後の活動として振り返りのワークショップを行い、現地調査を通して感じた石川町・中谷地区の抱える課題について共有をした。

今年が活動 1 年目ということもあって、最初は緊張や不安な部分があったが、中谷地区で出会った住民の皆さんをはじめ、ヒアリング調査で訪れた農家・団体の方々、中谷地区自治協議会さん、地域おこし協力隊の方、福島県地域振興課の職員の方々など、何もわからない私たち「よそ者」に対しても温かくかつ優しく接していただいた。一人ひとりが地域に対して大きな愛情を持っており、住民同士の団結力がある温かい地域であると感じた。

私たちも住民の皆さんの熱い想いに応えられるように、「よそ者・若者」の視点で、前提条件なく本気で実施したいと思った提案をさせていただき、実現できない提案もあるかもしれないが、1 つでも 2 つでも実効性のある提案を次年度実証実験として実現したいと考えている。

現メンバーの大半は 3 年生であり、来年も半分以上のメンバーが継続して活動をおこなっていく見込みである。3 月に卒業をしてしまう 4 年生も、来年以降も機会があれば活動に参加したり、個人で中谷地区・石川町を訪れたりとこのプロジェクトを通して築いた関係性を継続していけたらと思う。上記で述べた通り、メンバーのほとんどが 3 年生であるため、2，3 年後を見据えたメンバー編成をしていくことが私たちのチームの差し当たりの課題である。特に地域貢献に興味のある 1，2 年生の学生を中心にメンバーへの呼びかけを行い、一貫性のある活動を今後も行っていけるようにしていきたい。

最後に、本調査をするにあたり「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の運営事務局となっている福島県地域振興課の皆様、中谷地区自治協議会の皆様、中谷地区の皆様をはじめとして、多くの方々にご協力いただいた。お世話になった多くの方々に、厚く御礼申し上げたい。